

バプテスマの持つ力

マタイ 3:13~17

今日の聖書箇所には、主イエスがヨハネからバプテスマを受けたことが記されています。ヨハネはイエスの誕生のおよそ六ヶ月前に祭司ザカリヤと妻エリサベツの間に生まれました。ですからイエス様と同年齢です。ヨハネは大人になって預言者として活躍し、人々にバプテスマを授けていましたので、「バプテスマのヨハネ」と呼ばれるようになりました。イエスもまた、ヨハネに続いて、福音を宣べ伝え始められました。ガリラヤのナザレの村で静かに暮らしておられた生活から、公の生活へと入れられたのです。そして、公の生活の第一歩はバプテスマを受けることでした。今日はイエスがバプテスマを受けられたことの意味、そしてそのことが私たちにとってどういう意味があるのかを見てゆきたいと思います。

1) 神への悔い改め

まずイエスがバプテスマをお受けになったのは、ご自分が罪びとのひとりとなり、人類の罪を背負って、それを償い、人々に赦しを与えるためでした。

イエスの時代、ユダヤ人以外の人々は「異邦人」と呼ばれ軽蔑されていましたが、その「異邦人」の中にもユダヤの人々が信じてきたまことの神を信じ、その教えに帰依する人々が多くいました。そうした人々がユダヤ教に改宗するときには、バプテスマを受け、今まで偶像を礼拝してきた罪や、その他の罪を悔い改めました。本来バプテスマは「異邦人」のための改宗の儀式だったのです。ところが、ヨハネは、ユダヤ人にもバプテスマを授けたのです。それは血筋だけはユダヤ人であっても、神への信仰を忘れていた人々に、もういちど神の民としてやり直すようにと教えるためでした。これだけでも当時、画期的な出来事でした。ヨハネは、人々に「アブラハムの子孫だ」という誇りを捨て、徹底して罪を悔い改めるように教えたので、ヨハネの授けていたバプテスマは「悔い改めのバプテスマ」と呼ばれます。

「悔い改めよ、天国は近づいた」と説くヨハネの教えに心探られた人たちは、ヨハネからバプテスマを受けるために列を作って並んでいました。イエスもその列の中に並び、自分の順番を待っていたのです。イエスの番になったとき、ヨハネは驚いて言いました。「わたしこそあなたからバプテスマを受ける必要があるのに、あなたがわたしのところにおいでになったのですか。」(マタイ 3:14) イエスは罪のないお方、悔い改める必要のないお方です。むしろヨハネの方こそイエスからバプテスマを受けるべきなのです。しかし、イエスはあえて、ヨハネからバプテスマを受けることを望まれました。なぜでしょうか？それは、罪のないお方が、人類の罪を背負って、罪びとのひとりとなってくださるためでした。

聖書に「神は罪を知らない方を私たちのために、罪とされました。それは、私たちが、この方において神の義となるためです。」(コリント第二 5:21) とあります。神は正しいお方であって、罪に目をつむり、それをウヤムヤになさるようなお方ではありません。神の正しい裁きの前に立てる者は誰もいません。自分が忘れていてもいざとなれば悪魔は私たちのどんな小さな罪も見逃さないで責め立てます。しかし、同時に神は愛のお方であって、罪びとがその罪のゆえに滅びることを望んではおられません。どんなに重い罪であっても私たちが滅びることを神は全く願っておられません。正しい裁きと無条件の愛と赦し。これに対する唯一の解決として神はご自分の御子が人類の罪を引き受けるようにされたのです。

神の御子は、まず、人となって、この罪の世に生まれてくださり、次に、罪びとのひとりとなって、ヨルダン川でバプテスマを受け、そして、最期には、文字通り犯罪者として十字架の極刑を受けられたのです。主イエスの生涯すべて私たちのために神様がしてくださったことなのです。イエス・キリストは私たちの罪の結果をご自分の身に引き受けることによって、信じる者が、罪の赦しを受けることができるようにしてくださったのです。

ヨハネのバプテスマは「悔い改めのバプテスマ」です。私たちの受けるバプテスマにも神を信じてこなかった過去を捨てて、新しい生活に向かうという悔い改めの要素があります。しかし、私たちが受けるバプテスマには、悔い改めだけでなくヨハネのバプテスマにはないもの、イエス・キリストによる「罪の赦し」があります。ですからペテロは「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。」(使徒 2:38) と言って、人々にバプテスマを授けました。キ

リストの名によるバプテスマには、悔い改めだけでなく、罪の赦しがあるのです。どんなに自分を省みて自分の罪深さや弱さと向き合い、解決しようと必死に努力したとしても、罪の赦しが無ければ、というよりも「もうあなたの罪は赦されて大丈夫だ」と確実な声が無ければどこまで行っても私たちは悩み続けてしまうのです。

私たちは皆、ヨハネからバプテスマを受けるため列を作って並んでいる人々に似ています。しかしそこに主イエスが悔い改める者たちの列の中に加わってくださったように、今も、私たちと一緒にいてくださいます。ですから先に洗礼を受けて下さったイエスに従って洗礼を受けるなら（それはキリストの名において洗礼を受けるなら）、その人は罪の悔い改めと全き罪の赦しを受けるのです。イエスは「わたしがあなたの悔い改めを完成させる。それに答えて赦しを約束する」と語ってくださるのです。ですから、私たちは勇気を出してバプテスマを受けるのです。そこに罪の赦しがあるからです。勇気を出してと言いましたが考えてみてください。どれだけ私たちが犠牲を払ったのでしょうか？全知全能にして創造主なる神様が人となって私たちのところに降りてきてくださったのです。しかも、王としてではなく生まれる場所もなく飼葉桶に寝かされる赤ちゃんとして来てくださった。そして枕するところもなく最後は冤罪であるにも関わらず十字架の上で残虐な方法で処刑されたのです。人としてはどん底まで降りてきてくださったのです。そこまで私たちのために低くなり犠牲を払ってくださったのです。それに比べてイエス様が受け取りなさいと差し出してくださっている恵みと祝福を受け取るために神の前にひざまづくことや洗礼を受けることは大きな犠牲を払ったと言えるのでしょうか？イエスは私たちが悔い改め、信じてバプテスマを受け、罪の赦しを得ることができるため、まず、ご自分がバプテスマをお受けになられたのです。

2) 神への服従

第二にイエスがバプテスマをお受けになったのは、父なる神に従うためでした。ヨハネがイエスにバプテスマを思いとどまらせようとしたとき、イエスはヨハネに「今はそうさせてほしい。このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいのです」（マタイ 3:15）とおっしゃいました。イエスは、父なる神のみこころを成就するため、父なる神がお定めになったことに従われたのです。

私たちがバプテスマを受けるのも同じです。「心で信じていれば、べつにバプテスマを受けなくてもいい」といったことを聞くことがあります。そうではありません。イエスは「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのを守るように教えよ」（マタイ 28:19-20）と命じられました。バプテスマはイエス・キリストが命じられたものです。聖書では「信じる」という言葉と「従う」という言葉は同義語として使われています。イエス・キリストを信じるというのは、キリスト教の教義を頭脳で認めるということだけで終わるものではありません。信じることは従うことです。イエス・キリストを心で信じるなら、その信仰をバプテスマという目に見える形で表わすことが必要です。信仰が形をとって表わされる時、それは生きて働くものとなり、その人の日々の生活に、人生に、大きな祝福となって返ってくるのです。大きな祝福を与えてくれたら信じます。従います、ではないのです。その意味においてバプテスマは誰のためでもありません。自分のために受けるものです。信仰者にとって洗礼を受けることは神様に従っていることを表す最初の行為なのです。

3) 召命への応答

最後、第三にイエスがバプテスマをお受けになったのは、父なる神の召命に応えるためでした。父なる神は御子に、人類の罪を背負い、人々の身代わりとなって死ぬという使命をお与えになりました。イエスはバプテスマを受けることによって、そのみこころに服従されましたが、それは、嫌々、やむを得ず従ったということではありません。御父が御子に無理強いしたということでもありません。御父が、罪に苦しむ人々をいつくしまれたように、御子も人々を愛され、罪の世で苦しむ人々にあわれみの手を差し伸べられました。御父が罪びとの救いを願われたように、御子も罪びとの救いを願われ、そのために、自らを進

んで捧げられたのです。バプテスマは、イエスの服従と献身のしるしでした。

イエスがバプテスマを受けたとき、聖霊がイエスに下り、天からの声がありました。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」(マタイ 3:17) と。この「愛する子」こそ、イエス・キリストです。イエスは、バプテスマを受けることによって、神からの使命をお受けになりました。神の忠実なしもべとなり、神の召命にお応えになったのです。私たちが受けるバプテスマもまた、神からの召命のしるしです。キリストがそうされたように、私たちも神のしもべとなって、人々にキリストを証しするのです。バプテスマを受けたすべての人は、それぞれに働きは違っていますが、神のしもべ、キリストの証人としての召命を受けています。バプテスマを受けた者が、礼拝のたびごとにバプテスマと共に受けた召命を確認し、それに応えていくことを、神は望んでおられるのです。

教会はギリシャ語で「エクレシア」と言います。それは「呼び出された者の群れ」という意味です。私たちは「来なさい」との神の招きに応じて礼拝に集いました。イエスがバプテスマのとき聞いたのと同じ言葉、「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ」という言葉を、私たちは礼拝で聞きます。罪が赦され、神の愛する子として受け入れられていることを喜び、感謝するのです。神の恵みを与えるために十字架に至るまで低くなってくださった主イエスの前に低くなって恵みをいただきます。神の前に低くなるとはどうすることでしょうか？それは私たちが精一杯神を崇める、礼拝するということです。どのように神を礼拝するかによっていただく恵みも変化します。聖霊がその恵みをつなぐパイプのような役割を担います。イエスがバプテスマを受けたときお受けになった聖霊は、バプテスマを受けた者ひとりひとりに宿っています。礼拝によって神からの恵みをいただくのです。そして、この礼拝で、神からの使命を受けてそれぞれの場所に遣わされていくのです。

「イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば賜物として聖霊を受けます。」(使徒 2:38) ここにはバプテスマを受けないと聖霊を受けることはないと書かれています。以前テレビでジェット機の空中給油の様子を映したビデオが放映されていました。燃料を積んでいる飛行機からパイプが出て来て燃料を入れるジェットとガチッと接続して給油されるのです。受け口が無いと給油できません。バプテスマを受けたという事実はちょうどしっかりとした給油口があるようなものです。礼拝ごとに恵みの給油を受けるようなものです。もちろんすでに与えられている聖霊も働きます。信仰生活が長くなるとバプテスマを受けた時のことははるか昔のことように思われるかもしれません。しかし、バプテスマを受けたと言う事実はいつまでも変わることがありません。そして神を心を込めて礼拝するなら、いつでも受け口から神の恵みを受けることが出来ることを感謝したいと思うのです。